

# 明治学院歴史資料館 ニュースレター No.6

明治学院歴史資料館発行  
2015年7月

## 目次

- ・「日本最初のオラトリオ」——安部正義《ヨブ》演奏会報告記
- ・寄贈・新着資料紹介
- ・「明治学院 はじめて物語 ヘボン博士編」を開催中
- ・明治学院第二代総理 井深梶之助著『耶蘇教問答』を復刻
- ・歴史資料館活動報告／新刊案内
- ・歴史資料館資料集第10集①『バラ学校を支えた二人の女性』



## 「日本最初のオラトリオ」——安部正義《ヨブ》演奏会報告記①

2015年2月15日(日)に本学院礼拝堂(白金キャンパス)において、当歴史資料館主催による「安部正義作曲 オラトリオ《ヨブ》演奏会」が行われた。入場無料の公演であったが、演奏会の一ヶ月前に座席はすべて予約済に。当日は330余名の来場者に恵まれ、あらためて《ヨブ》という作品に対する、人びとの関心の高さを感じた次第である。

安部正義(あべ・せいぎ 1891~1974)は戦前に本学院高等商業部教授をつとめた教会音楽家で、日本のキリスト教音楽に多大な貢献をはたした人物。彼の代表作オラトリオ《ヨブ》は、旧約聖書の『ヨブ記』を題材とした「日本最初のオラトリオ作品」で、1945(昭和20)年に完成した。初の全曲演奏は1967(昭和42)年5月に本学院礼拝堂で行われ、その後、1969(昭和44)年と1975(昭和50)年にも同会場で再演されたが、それ以降、演奏は途絶えていた。そこで、本学院の「文化遺産」とも言うべきこの作品をあらためて世に問うべく、40年ぶりの復活演奏が企画された。《ヨブ》の演奏には本来、大規模なオーケストラを必要とするが、今回は作曲家の堀内貴晃氏に編曲を依頼し、より小規模な「室内楽版」で演奏を行った。

演奏会は、小暮修也(学院長)、および長谷川一(歴史資料館館長)による挨拶ではじまり、筆者による作品解説のあと開演となった。出演者は、安積道也(指揮)、柳沢亜紀(ソプラノ)、穴澤ゆう子(アルト)、櫻田亮(テノール)、萩原潤(バリトン)、山田大智(バス)の各氏、そしてOratorio JOB Memorial Choir(合唱)と東京バツハ・カンタータ・アンサンブル(室内楽)。1時間半に及んだ演奏会の様子は、次ページの「報告記②」に譲る。

当日、歴史資料館展示室では、自筆総譜や、スケッチ、草稿譜など、《ヨブ》に関する所蔵資料を公開し、こうした楽譜資料が源となって、音楽が鳴り響いていることを紹介した。なかでもブルーブラック色のインクで美しく仕上げられた自筆総譜は、多くの見学者の関心を集めていた。

当日出席された安部正義のご令孫、安部勉牧師より次のようなお言葉を頂いた。「楽譜が発掘され、それを展示、論文とすることも十分な歴史資料研究であると思う。だが、それを“初演の場で再演すること”を目指し多くの労力と時間を費やして来られたことを思う時、“歴史資料とは何か”という根本的な理念、価値観に改めて明治学院の考えに深い敬意と誇りを感じた。(中略)演奏という形での“歴史資料の開示”この理念に心から感謝すると共に皆さんの“思い”“情熱”を私も大切に受け継ぎたい(後略)」——当歴史資料館として、これ以上ない励みのお言葉を頂いたことに深く感謝し、今後の活動につなげてゆきたい。

加藤拓未(歴史資料館研究調査員)



## 《ヨブ》演奏会報告記②

オラトリオ《ヨブ》室内楽版の完成披露となった今回の演奏会は、多くの来場者に恵まれ、盛会となった。この作品の大まかなプロットは、次のようになる。信仰の篤い主人公「ヨブ」に対し、「サタン」が次々と苦難を与え、その信仰を試す。財産や家族を失い、重い病を患ったヨブは、その苦難の理由を神に求めるが、神はなかなか応えない。しかしついに「沈黙の神」が現れ、ヨブとの対話が行われる。ヨブは対話を通して、神のもとで生きることの平静さを知り、悔い改める。

こうした物語のナレーター役として、この作品では「天使」が設定されており、当日の演奏では柳沢亜紀氏(ソプラノ)が清澄な声でこの役を好演した。「ヨブの妻」を演じた穴澤ゆう子氏(アルト)は、夫を理解できない苦しみを的確に表現し、タイトルロールの萩原潤氏(バリトン)は「ヨブ」の苦悩を内省的に歌い上げ、繊細な歌唱でその心情を描き分けた。

もう一方の重要な役である「神」の櫻田亮氏(テノール)は、難度の高いアクロバティックな独唱を見事に歌いのけ、万全な歌唱技術を示すことで、まるで「万能の神」を具現化しているかのようであった。そしてヨブに試練を課す「サタン」はこの作品において、あたかも英雄のように堂々とした音楽で描かれており、この役を演じた山田大智氏(バス)は雄弁な歌唱で、その英雄性を見事に醸し出してみせた。

当日の演奏を統括した指揮者の安積道也氏は、キビキビとした快活なテンポで物語をまとめてゆき、実に現代的な《ヨブ》解釈を提示した。特に終盤の「神」と「ヨブ」の対話を描いた第24～29曲の扱いは的確で、ここでは神とヨブのそれぞれの独唱曲の旋律が、二重唱や合唱曲へと敷衍してゆくが、安積氏はこうした情景の積み重ねを実に論理的に構築していった。そして、百戦錬磨の東京バハ・カンタータ・アンサンブルが、この若き指揮者を手厚くサポートし、その演奏をさらに高い水準へと導いた。ちなみに安積氏は本学出身者で1995(平成7)年に文学部心理学科(現、心理学部)を卒業後、10年のドイツ音楽留学を経て、現在、西南学院音楽主事として奉職している。

合唱団は、合唱指揮者の吉田真康氏を中心とする合唱愛好家たちが集まり、今回の演奏会のために特別に結成された。その演奏は真摯そのもので、特に最終合唱の圧倒的な感動は、彼らの力なくしては生まれなかっただろう。この曲は安部正義作の讚美歌《まぶねのなかに》の旋律を使ったフーガ合唱で、声のアラベスク文様を紡ぎながら、クライマックスへと到達する。そして最後に静かな祈りに満ちた「アーメン」の音が響きわたり、全曲が結ばれた。

終演時にはアンコールとして、《ヨブ》のメインテーマであるコラールを来場者とともに唱和し、万雷の拍手のなか《ヨブ》室内楽版の初演奏会は終了した。

## 《ヨブ》演奏会出演者・編曲者

### Conductor & Arrangement



指揮  
■安積道也



編曲  
■堀内貴晃

### Soloist



ソプラノ  
■柳沢亜紀



アルト  
■穴澤ゆう子



テノール  
■櫻田 亮



バリトン  
■萩原 潤



バス  
■山田大智



## オラトリオ《ヨブ》 室内楽編曲の意義

オラトリオ《ヨブ》は本来、演奏にあたって19世紀ロマン派時代の2管編成のオーケストラが必要となる。この編成で演奏を行った1969(昭和44)年5月の東京文化会館の演奏会では、器楽奏者の総勢は「53名」であった。こうした大規模な編成は予算的な負担が大きい上に、会場の広さを考えた場合でも明治学院の礼拝堂では演奏がむずかしい。

学院では、かつて礼拝堂のパイプオルガンの伴奏で《ヨブ》を演奏していたが、2009年、新パイプオルガンを更新導入した際、堂内における楽器の設置場所が変更されたことから、演奏の環境も変化した。そのため、かつてのようなパイプオルガン伴奏による演奏もできなくなった。

「学院の礼拝堂で演奏できなければ、学院の文化的遺産である《ヨブ》を未来の学院へと伝えることができない」と考えた歴史資料館は、礼拝堂のスペースにふさわしく、小規模な器楽アンサンブルで演奏できる《ヨブ》の「室内楽編曲」が必要であるという見解に達した。そこで、安部正義のご子息・安部正春氏の許可をいただき、作曲家・堀内貴晃氏に編曲を依頼し、完成したのが、今回の演奏会で披露された「《ヨブ》室内楽版」である。

編曲の結果、12名の器楽奏者で演奏が可能になった。その内訳は、フルート×1、オーボエ×1、クラリネット×1、ファゴット×1、ホルン×2、トランペット×1、第1ヴァイオリン×1、第2ヴァイオリン×1、ヴィオラ、チェロ、コントラバス。これは、東京文化会館公演の器楽奏者数53名と比べると、20%程度の規模となっている。

室内楽版は、編成がコンパクトな分、スケールの大きさでは大オーケストラに及ばないことは確かだが、逆の意味で利点もある。室内乐的アンサンブルは、より緊密な響きの音楽を可能にしてくれる。それゆえ、安部正義の音楽と緊密なアンサンブルは、21世紀の礼拝堂にふさわしい、より敬虔な響きと新しい可能性を指し示してくれることだろう。歴史資料館では「室内楽版」の完成によって、今後、《ヨブ》に多くの演奏の機会が訪れることを願っている。演奏を希望される団体は、当館にご相談いただければ幸いである。

なお、1969年の東京文化会館公演の録音資料に関しては、長らく存在が確認されていなかったが、2014年暮れに卒業生の榊田恒氏(70年大法卒)から録音資料が提供された。この音源は、管弦楽伴奏による《ヨブ》の唯一の貴重な演奏記録であるため、榊田氏のご厚意に感謝を申し上げます。

加藤拓未(歴史資料館研究調査員)

## 「オラトリオ《ヨブ》コンサートパンフレット」を差し上げます

2015年2月15日に開催したオラトリオ《ヨブ》コンサートのパンフレットを先着100名様へ差し上げます。

### 【内容】出演者紹介

安部正義とオラトリオ《ヨブ》解説  
新共同訳の対訳付きの歌詞

ご希望の方は、氏名、住所、電話番号、送料分の切手(205円分)を同封し明治学院歴史資料館「ヨブパンフレット」係へお送りください。

定員になり次第終了とさせていただきます。

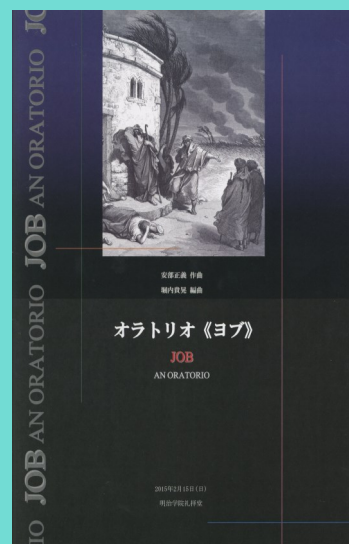
受付終了は当館ホームページにて発表致します。

### 【明治学院歴史資料館ホームページ】

<http://shiryokan.meijigakuin.jp/>

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

明治学院歴史資料館「ヨブパンフレット」係





# 寄贈資料紹介

## 「L. M. S.」の資料について

学生サークル「L. M. S.」の草創期の同窓生をお招きし、当時の音楽活動について語っていただく座談会を2014年4月17日(木)12:00～15:00にインブリー館13会議室にて開催した。「L. M. S.」(Light Music Societyの略)は、ハワイアンをはじめ、ジャズ、カントリー&ウェスタン、ポップス、ロックなど、いわゆる「軽音楽」と総称される音楽を愛好する学生団体で、今日でも現役学生による活発な活動が行われている。

当日は、木村禎太郎氏(1963年大商卒)、原曙美氏(1965年大社卒)、海老原靖也氏(1966年大経卒)、麻田浩氏(1967年大経卒)、重見康一氏(1967年大経卒)、吉田順治氏(1967年大経卒)、麻生静子氏(1968年大社卒)の7名のL. M. S. 出身者が出席し、発起人である五嶋正道氏(1967年大商卒)が司会をつとめた。「L. M. S.」の設立経緯など、1960年代の貴重なお話とともに、以下の表にあるような当時の資料をご寄贈およびご提供いただいた。なお、当日の座談会の内容は、後日、報告を予定している。

### ◎明治学院大学「L. M. S.」同窓生寄贈資料 (五十音順)

寄贈者氏名	媒体	内容	時期	資料形態	点数
麻生 静子 様	パンフレット	JAZZ!THE NEW YEAR JAZZ CONCERT「blue minors recital」 (於:新宿厚生年金中ホール)	1965年1月	複製	1点
海老原 靖也 様	写真	LMSジャズバンド「ブルーマイナーズ」(62・64年度生)		複製	1点
木村 キタロー (禎太郎)様	写真	フーピーキムラとLMSバンド「ロイヤルハワイアンズ」 (於:大井町ナイトクラブ「ラブスター」)	1961年	複製	1点
	写真	「夜のヒットスタジオ」出演(木村キタロー・黒木憲)	1968年	複製	1点
	写真	「夏の海上ページェント」出演(於:逗子、鎌倉など)		複製	1点
	写真	「TBSテレビ全国学生コンクール」出演		複製	1点
	写真	ダンスパーティ演奏		複製	1点
	写真	熱海温泉出演		複製	1点
	写真	「ロー・長沢とレイエ・アイランダース」エキストラ出演 (於:新宿ナイトクラブ「エリーゼ」)		複製	1点
	写真	「創立84周年・白金祭」演奏	1961年	複製	1点
重見 康一 様	写真	重見氏所属「モダン・フォーク・カルテット」演奏風景		複製	1点
	写真	重見氏所属「モダン・フォーク・カルテット」演奏風景	1982年頃	複製	3点
	プログラム	重見氏所属「モダン・フォーク・カルテット」「アメリカ・ツアー」 ※参加メンバーのサイン入り	1965年8月23日	複製	1点
	プログラム	「風のようにフォークは流れ vol.13 プレミアム・コンサート第4弾」(於:めぐろパーシモン大ホール、「モダン・フォーク・カルテット」出演)	2013年9月28日	実物	1点
原 曙美 様	プログラム	LMS所属 blue minors recital:The New Year Jazz Concert	1965年	複製	1点
	写真	LMS活動「大学1年 お正月」	1962年	複製	8点
	写真	LMS活動「大学2年 夏～3年5月」	1962～63年	複製	16点
	写真	LMS活動「大学3年 6月～4年6月」	1963～64年	複製	5点
	写真	LMS活動「大学4年 6月～卒業まで」 ※マイク眞木・森山良子の写真を含む。	1964～65年	複製	8点
吉田 順治 様	写真	HAWAIIAN FESTIVAL LMSバンド「ロイヤルハワイアンズ」 演奏風景	1964～65年頃	複製	4点

## そのほか

ご寄贈いただきました資料の一部をご紹介します。ご寄贈いただきました方々へ感謝いたします。

- 生島 美紀子 様 昭和前期に活躍した作曲家・大澤壽人関連資料。
- 池宮 正才 様 明治学院大学洋楽鑑賞部『MUSE』第9号、第10号、第11号(1972～74年)
- 大西 晴樹 様 『キリスト教学校教育史話 宣教師の種蒔きから成長した教育共同体』大西晴樹著・教文館

## 明治学院卒業生 本郷正嘉氏の戦病死遺書

戦病死された本学院高等商業部卒業生本郷正嘉氏の絶筆とアルバムなどが親族の佐藤直樹様から寄贈されました。

本郷氏は明治学院中学部に入学、1935(昭和10)年に高等商業部を卒業後、真珠湾攻撃の前に召集されて陸軍東部八部隊(麻布三連隊)に入営、その後満州に転属し輜重兵となりました。ポツダム宣言受諾後、混乱の中、既に罹患していた腸結核が悪化し、引き揚げもままならないままに、鴨緑江河口の町である安東で落命しました。

第二次世界大戦の日本の戦没者数は正確な数は出ていませんが、厚生省は総数を310万人、うち軍関係者と軍属が230万と推計し、その内訳は戦死より戦病死(戦傷死・補給不足による病死・餓死)が多いと伝えられています。

明治学院在学中は精勤賞である「ワイコッフ・マコーレー賞」を受けるほど健康で、明るく笑って友人と共に写真に写り、「心にも体にも苦勞のない学生生活でした」と述べた本郷氏でしたが、書簡では戦地で帰国もままならない中で悪化する腸結核と闘い、無念の思いを残しながら悲惨な最期の時を綴っています。

松岡良樹(歴史資料館研究調査員)



軍服を着た本郷氏



1934(昭和9)年6月14日撮影 学生時代友人と(右から2人目)

### 寄贈資料リスト

書簡	「大東亜戦争で戦没せる本郷正嘉の遺書」	3通分
アルバム	「本郷正嘉アルバム」	1点
アルバム	「中学部卒業記念写真帖」	1点
アルバム	「THE REMEMBRANCE(明治学院高等商業部卒業アルバム)1935年」	1点
卒業証書	中学部卒業証書	1点
卒業証書	高等商業部卒業証書	1点
賞状	精勤賞「ワイコッフ・マコーレー賞」	1点
メダル	中学部のサッカー部・野球部・柔道部の記念メダル	各1点
本	『BOOK-KEEPING SIMPLIFIED』 W. O. Buxton著 1933年刊	1点

- 熊本 一規 様 『儒学者 谷口藍田』 浦川晟著・明德出版社
- 栗城 好次 様 明治学院出身・学徒動員特攻隊 長谷川信、『きけ わだつみのこえ』 関連資料
- 松井 和男 様 『朗らかに笑え ユーモア小説のパイオニア 佐々木邦とその時代』 松井和男著・講談社
- 新倉 勢子 様 『誇る者は主を誇れ ―ヘボンと是清―』 新倉勢子著
- 花島 光男 様 ヘボン博士顕彰会 米国大使館宛て記念碑嘆願書・回答書(写)
- 藤田 佳久 様 『日中に懸ける 東亜同文書院の群像』 藤田佳久著・中日新聞社 ほか2冊
- 山本 昌実 様 明治学院中学校卒業アルバム・関連資料(1967年)/明治学院高等学校パンフレット(1968年)  
白金フィルハーモニー管弦楽団創立20周年記念第21回定期演奏会(2012年10月28日)  
パンフレット等
- 他大学・学校・資料館・博物館より 資料集・年史類

2015年は、ヘボン博士 生誕200年です。

「明治学院 はじめて物語 ヘボン博士編」を開催中

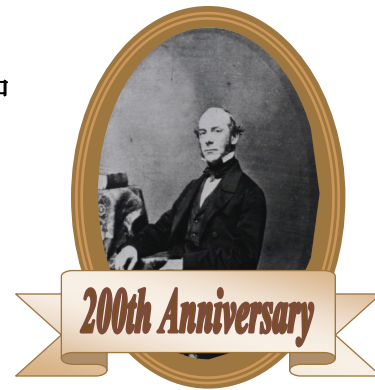
明治学院の創設者の一人であるJ.C.ヘボン(James Curtis Hepburn)は、1815年3月13日ペンシルバニア州ミルトンに生まれました。プリンストン大学でラテン語、ギリシャ語、ヘブル語、化学などを学び、つづいてペンシルバニア大学では脳卒中の研究で医学博士の学位を取得、開業医として成功を修めます。

その後、信仰の篤いヘボン博士は、東洋伝道という志を夫人クララと共に貫き、1859年に来日以來、神奈川、横浜での生活は33年間におよびました。

明治学院歴史資料館展示室ではヘボン博士生誕200年を記念して「明治学院 はじめて物語 ヘボン博士編」を開催中です。幕末から明治を過ごしたヘボン博士は、キリスト教伝道だけでなく、日本の近代化にも影響する多くの功績を残しました。そのなかでもヘボン博士が関わる日本ではじめての出来事の特集し、パネル・関連資料の展示を行っています。展示室はどなたでも自由に見学できます。来館お待ちしております。

#### ■【明治学院歴史資料館】

明治学院白金キャンパス・記念館1F。平日9時～16時。



#### 明治学院 はじめて物語 ヘボン博士編

- ・民衆を救ったはじめての西洋点眼目薬
- ・「近代男女共学」のさきがけ ヘボン塾
- ・はじめての日本語(和英)辞典『和英語林集成』
- ・日本語の第四の表記 ヘボン式ローマ字
- ・ヘボン博士の手術と西洋義足のはじめて
- ・はじめての聖書日本語全訳
- ・初の外国人専用リゾートホテル 金谷カテッジイン

#### 関連資料展示

- ・ヘボン博士編纂『和英語林集成』初版／手稿
- ・ヘボン博士ら宣教師の私塾で使われた教科書
- ・ヘボン博士・ブラウン博士共訳  
「新約聖書四福音書」
- ・ヘボン博士の目薬処方『米利堅平文常用方』  
(内藤記念くすり博物館蔵)
- ・目薬「精錡水」の看板 等

※時期により展示物が若干異なる場合もございます。ご了承ください。

## 歴史資料館2014年度の統計・活動報告

### 【活動記録】

- 明治学院歴史資料館委員会 第1回2014.6.13／第2回10.17／第3回2015.1.23
- 明治学院中学校1年生見学来館 2014.9.10
- 東京都文化財ウィーク インブリー館・記念館・礼拝堂の一般公開／特別開館 2014.11.1～3
- 神奈川新聞 教育面コラム「知の遺産」2014.12.1～2015.1.12(連載4回) 記事執筆
- オラトリオ《ヨブ》コンサート 2015.2.15
- 明治学院大学オープンキャンパスでのパネル展示／展示室特別開館
- 写真資料のデジタル化・目録制作
- 井深梶之助『耶蘇教問答』復刻
- 『明治学院歴史資料館資料集 第10集①』刊行
- レプリカ作成 「井深梶之助の日記」／賀川豊彦『矛盾録』

### 【統計】

資料提供・レファレンス件数 45件  
来館資料閲覧件数 5件  
展示室総来館者数(概算) 5800人



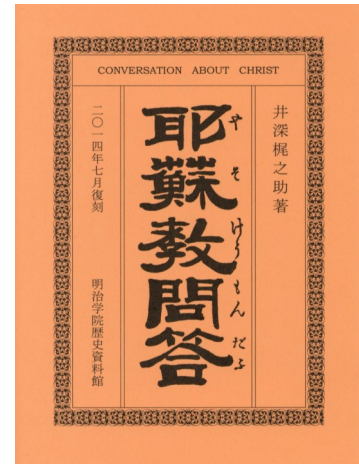
生誕160年を記念して

## 明治学院第二代総理 井深梶之助著『耶蘇教問答』を復刻

や そきよもんど

会津藩士の家に生まれ戊辰戦争にも参戦した井深梶之助(1854年7月4日生)は、藩校や外国人宣教師の私塾で英学を、明治学院の前身のひとつ東京一致神学校で神学を学びキリスト教への信仰を深めていった人物です。牧師の資格である按手札を受け東京麹町教会の牧師となり、明治学院の前身の一つである東京一致神学校でも教鞭をとります。明治学院の創設にも関わり、念願のニューヨーク・ユニオン神学校への留学を果たすと、ヘボン博士の後を継ぎ明治学院第二代総理を30年間務めました。信仰篤く勤勉な井深総理は、日本のキリスト教界での活躍も多く、また教育にも熱心で日本のキリスト教教育の先駆者的存在です。

明治学院歴史資料館では、井深梶之助生誕160年を記念して、井深梶之助著『耶蘇教問答』を2014年7月に復刻いたしました。本書は井深が東京一致神学校在学中の1878(明治11)年に著したキリスト教を易しく説くための11ページの本です。「和助さん」と「伝蔵さん」による問答形式の口語で易しい言葉で書かれているため、東京一致神学校や明治学院の学生に読まれ、一般人へのキリスト教の布教にも使われたようです。



井深梶之助『耶蘇教問答』  
最初の印刷 1878(明治11)年(推定)  
復刻版発行 2014年7月

### 新刊案内

## 『キリスト教学校教育史話——宣教師の種蒔きから成長した教育共同体』



### 大西晴樹

(明治学院大学長、明治学院長を歴任し現在、明治学院大学経済学部教授、キリスト教史学会理事長)

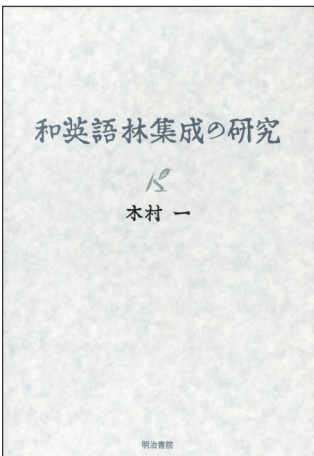
教文館 2015年2月20日刊

著者は本書で「キリスト教学校教育の伝来とその将来に対しては関心をもち、期待を寄せる者でもあります。」と明言しており、おもに明治学院の学部長、学長、学院長としてキリスト教学校の運営に関わっていた約10年間に発表した講演や刊行・書き下ろし論文などが収録されている。

J.C.ヘボンはじめ来日宣教師、キリスト教大学設立運動、神社参拝とキリスト教学校、キリスト教学校教育論の論争史などテーマは多岐にわたり、日本のキリスト教学校教育の淵源から未来までを通観する小史となっている。



## 『和英語林集成の研究』



### 木村 一

(東洋大学文学部国文学科卒業、東洋大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程中途退学。東洋大学文学部助手、非常勤講師、明海大学外国語学部日本語学科専任講師を経て、現在、東洋大学文学部日本文学文化学科准教授。文学博士。明治学院歴史資料館研究員。)

明治書院 2015年2月25日刊

J.C.ヘボン編纂の日本初の近代的和英・英和辞書として知られる『和英語林集成』は、幕末から明治期まで各分野にも多大な影響を与え、日本語研究の資料としても重要な位置を占める。

本書では、『和英語林集成』の初版刊行と印刷所について、改版の意図、周辺資料、ヘボン式ローマ字の祖形、もととなったヘボン直筆の「手稿」についてなど、様々な面から分析・考察がなされている。著者は、『和英語林集成』について多くの論文を発表しており、本書はその研究の集大成ともいえる一冊である。

バラ学校を支えた二人の女性  
—ミセス・バラとミス・マーシュの書簡—

The Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church  
Lydia Ballagh & Belle Marsh

本書は、ヘボン塾を受け継ぎ、1876(明治9)年1月より横浜居留地39番においてJ.C.バラ(John Craig Ballagh)が運営したバラ学校を支えた二人の女性ミセス・バラ(Lydia Ballagh)とミス・マーシュ(Belle Marsh)の本国アメリカへ宛てた書簡の翻訳である。

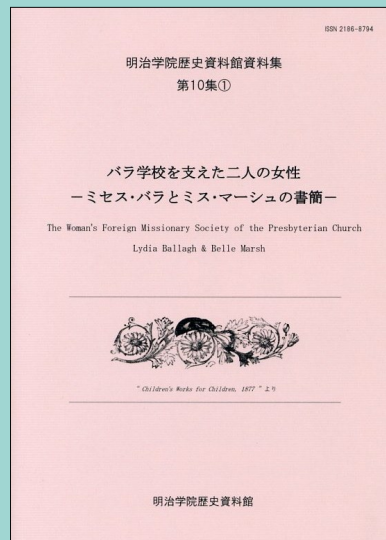
明治学院の源流の一つであるバラ学校は、これまでほとんど研究されてこなかったが、書簡には校舎やそこで学んでいた生徒たちの様子、当時の横浜居留地周辺の町並みなどが記されており、バラ学校の実態を垣間見ることができる史料である。

ミセス・バラは、1875(明治8)年J.C.バラと結婚し、夫の運営するバラ学校を支えるとともに、ヘボン夫人(Clara Mary Hepburn)が1874(明治7)年に開始した住吉町小学校(Sumiyoshi Day School)を受け継ぎ、その責任を負った。1884(明治17)年、休暇帰国中のアメリカで肺炎を患い急逝する。本書で訳出した書簡は、米国長老教会女性海外伝道協会(The Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church)の機関誌*Woman's Work for Woman*ならびに子ども向け機関誌*Children's Work for Children*に掲載されたミセス・バラによる日本からの報告書簡である。

ミス・マーシュは、1876(明治9)年10月米国長老教会女性海外伝道協会派遣の女性宣教師として横浜に着任した。居留地39番においてバラ夫妻とともに生活し、バラ学校と住吉町小学校で教鞭をとり、伝道活動にも従事した。1879(明治12)年、バプテスト教会の在日宣教師ポート(Thomas Pratt Poate)と結婚し、バプテスト教会に転籍する。その後、宣教師夫人として、仙台、盛岡など東北地方の開拓伝道に力を尽くし、1892(明治25)年に帰国した。本書で訳出した書簡は、ミス・マーシュが来日間もない時期に居留地39番からアメリカの家族、親類に宛てたものである。ミセス・バラの書簡が機関誌の掲載を念頭において書かれたものであったのに対して、ミス・マーシュの書簡は完全に私的であり、女性宣教師としての使命感と同時に、戸惑いや不安、バラ夫妻に対する感情などが素直に吐露されている。

本書で史料として取り上げた米国長老教会女性海外伝道協会の子ども向け機関誌*Children's Work for Children*は、将来の宣教師育成などを目的として、アメリカの子どもたちに伝道地への関心を促すため、アジア・アフリカの文化や生活習慣を紹介する読み物を多数掲載している。日本に関しても、ミセス・バラの報告書簡をはじめとして、明治学院の創設期を支えた宣教師や宣教師夫人らのエッセイが複数見出せる。歴史資料館では、今後も資料集として継続的にそれらを翻訳紹介していく予定である。

訳者：齋藤元子(歴史資料館研究調査員)



2015年3月刊行

定価:800円(税込)

明治学院歴史資料館  
ニューズレターNo. 6

発行者 明治学院 歴史資料館

発行日 2015年7月31日

電話 03-5421-5170

〒108-8636

東京都港区白金台1-2-37

E-mail

siryokan@mgquad.meijigakuin.ac.jp

ホームページ

http://shiryokan.meijigakuin.jp/

2014年度 歴史資料館委員・スタッフ

【明治学院歴史資料館委員会】

委員長 長谷川 一・歴史資料館長(文学部教授)

委員 秋月 望・図書館長(国際学部教授)

渡辺祐子(教養教育センター教授)

村井信一(法人事務局長)

徳永 望(明治学院高等学校教諭)

播本秀史(文学部教授)

植木 献(教養教育センター准教授)

鈴木直子(図書館資料管理課長)

大内俊介(明治学院中学校教諭)

【歴史資料館】

研究員 鈴木範久 辻 直人 木村 一

研究調査員 松岡良樹 齋藤元子 加藤拓未

事務局 桑折美智代 藤田桃香